博物館学実習風景

飛鳥資料館が博物館学実習生の受け入れをおこなっているということが、各大学関係者に認知されてきたのでしょう。

実習は、展示の実際（構成から展示まで、展示品の借用）、展示解説の実際、博物館と建築史、博物館展示の新傾向、博物館のＩＴ化、新しい博物館学構築に向けて、と題して講義および演習をおこないました。以下、その一部を紹介します。

「展示品の借用」では、展示品貸し借りの際の作法について当館の展示品を例に講義をおこない、演習として展示品の梱包から開梱までを実際に実習生がおこないました。当館の性格からして、発掘調査で出土した遺物（考古遺物）を取り扱うことが多いのですが、実習生のほとんどが考古学専攻ではないために、はじめて考古遺物を取り扱う実習生も多く見られました。

今年度の博物館学実習が、実習生にとって有益なものとなったことを期待します。

（飛鳥資料館　西山和宏）

飛鳥資料館　秋期特別展示『A0の記憶－文化財建造物保存図－』

今年度、飛鳥資料館の秋期特別展は、「Ａ０（エーゼロ）の記憶－文化財建造物保存図－」と題して2002年10月８日から12月１日の会期で開催いたします。また、この展覧会に伴って文化遺産研究部建造物研究室長の清水真一による特別講演会「建造物保護の歩みと修理記録等の保存」を10月12日、午後２時から当館講堂にておこないます。

文化財建造物は、建立からの長い年月、所有者の尽力によって保護されてきました。明治30年に古社寺保存法が成立し、国の事業として文化財建造物

群馬県、妙義神社本殿・拝殿・幣殿、側面図

の修理工事がはじまります。こうした修理工事ごとに、綿密な調査がおこなわれ、修理工事報告書とA0版の大きなケント紙に烏口（からすぐち）や面相筆（めんそうふで）を用いて墨入れした、保存図と呼ばれる図面が作成されます。修理技術者によって永年保存を目的に作成された保存図は、そのずべてが古建築の正確な記録ということだけにとどまらず、図面作品として美術的な側面さえも伴う、貴重な資料となっています。今回の特展では、ほとんど人目のふれることのない保存図を中心に、明治時代から現在に至るまでの修理工事の歴史をテーマとする展示を企画いたしました。

また、修理の際には、腐朽などによりやむを得ず部材が取り替えられることがありますが、取り外された古材には、時代の特性を示すものや、銘文を残すものも含まれ、建物と同様の価値を有するものもあります。今回、昭和19年の焼失から現在まで大切に保存されてきた法輪寺三重塔の焼損部材を、古建築への理解を深める資料として、展示したいと考えております。

（飛鳥資料館　西山和宏）

佐原　真　元埋蔵文化財センター長逝く

「おはよう佐原です。ちょっと、教えて欲しいのだけど」

佐原コールで知られた佐原真氏が、７月10日朝逝去された。７月20日のお別れ会には、１千人以上の人々が訪れたという。

昭和39年入所の「花の三九組」として、長く研究所に勤務・活躍された佐原氏の業績について、改めて申し上げる必要もないでしょう。考古ボーイとして出発した佐原氏が、縄文時代を手始めにさまざまな分野に領域を広げ、考古学者として大成されことは異論がないところ。その活動の源はご自身の努